

(30) 第二バチカン公会議後、現在に至るまでのローマ教

皇庁(具体的には「ローマ教皇庁・教育省(旧教育聖省)」)のカトリック教育に関する一連の流れを追ってみると、一九六五年の第二バチカン公会議では、「キリスト教的教育に関する宣言」(Gravissimum educationis)が発表された後、「大学環境における司牧(Sur la Pastorale universitaire)」(一九七二年)、「現代世界におけるカトリック大学(Catholic University in the Modern World)」(一九六七年)、「カトリック学校(The Catholic School)」(一九七七年)、「教会立大学憲章(Sapientia Christiana)」(一九七九年)、「学校に働く信徒の使命(Lay catholic in schools)」(一九八二年)、「カトリック学校における宗教教育(Dimensione religiosa dell'educazione nella scuola cattolica)」(一九八七年)、「教会と大学文化(Chiesa e cultura universitaria)」(一九八八年)、「カトリック大学憲章(Ex Corde Ecclesiae)」

(一九九〇年)、「大学及び大学に関わる文化環境における教会の存在(The presence of the Church in the University and in University Culture)」(一九九四年)、「紀元二千年を迎えるカトリック学校(The Catholic School on the Third Millennium)」(一九九七年)などがある。

(31) 真野一隆、前掲書、三〇頁。

(32) 佐藤敏夫「キリスト教学校と文化倫理学」、青山学院大学キリスト教文化研究センター編「現代におけるキリスト教教育の展望」ヨルダン社、一九九六年、六頁。

(33) 真野は、アメリカにおけるキリスト教主義学校のあり方にふれつつ、そこでの問題点を指摘している。真野一隆、前掲書、一一七頁以下。

(34) 行廣泰三・傍島聖雄「カトリック教育新聞休刊によせて」「カトリック教育研究」一八号、日本カトリック教育学会、二〇〇一年、九〇頁。

随筆

「情操教育」論争に思う

1 神・仏

私に社会科学関係の友人がいる。合理主義者で、左翼的な社会主義者で、鼻っぺしが強い。自分は一人で生きている。自分を左右するのは自分しかない。何か絶対なる存在に頼って生きるのは人間の弱さであって、頼むのは自分のみである。それが主体的に生きることだ、と普段から言っていた。無論宗教の意味など認めない。

その彼が大病にかかった。大学を長期間休職し、生死の境をさまよった。小康を得て大学に復帰し授業を再開したがこれも続かず、また休職となった。二年半の闘病生活を経て、結局、辞職せざるを得なくなった。心の痛むことだった。

ある日彼がやってきていろいろと話合ったのだが、彼は言った。「自分のことは自分で処理できる筈なんだが、しかし、自分のいのちは自分だけのものではない、自分を生かしている

駒澤大学名誉教授

奈良康明

なら やすあき

何かがあるような気がするのだが……」。こう言いつつ、しかし、急いで、付け加えた。「いや、そんなものを信じているわけじゃないよ。ただそんな感じがするだけだ！」。

その何物かを神とか仏とかいうんだし、無理しないでその存在を認めたらどう？ と私は言ったのだが、彼から返事は戻ってこなかった。

いのちの危機に会って、自分ではどうしようもない大きな力が自分のいのちにはたらいっていることに気付く。本人は意識しなくても、宗教心の始源のようなものを彼は体験したわけだが、日ごろから理屈だけで生きてきただけに、どうしたらいいのか、あらためて自分とは何かを新しい視点から眺めはじめていたのであろう。

自分を生かしている何か大きな存在への気づき。それは畏敬の念であるし、宗教にとって基本的な要素である。それを神とか仏とか特定しないでも、その存在は説けるのではないか。いや、国公立の学校でも、それを神といい、仏というのだ、とまで言ってもいいのではないか。中教審の議論の中でも、仏教、キリスト教、神道などの各宗教の人に来て貰って平等に話を聞く、あるいは学年毎にいろいろな宗教の話を聞く、などのアイデアも話し合われたという（堀出敏一『いま宗教教育を考える』、日本宗教連盟、二〇〇三年、七・八頁）。神とか仏とかの宗教的はたらきを特定の宗派に限るのではなく、一般的知識として平等に説くことは出来るのではないだろうか。

2 アゲハチョウの生命

私の後輩の寺院副住職がいる。檀家に対して誠実に対応しているが、教誨師としてもはたらいっている。〈若く未熟な自分が厳しい判決を得た人に対して何が説けるのか？ 先輩たちに教えられながら、相手の話を聞くことに専念している。相手の立場に同じること、仏教でいう「同事」の意味をいろいろに考えながら努力している〉のだという。「同事」とは仏教では慈悲のはたらきで、他者に同じることである。人々のいのちへの執着の激しさ！ それを我が身に引きあてながら、いのちの大切さをあらためて実感していると私に語ってくれた。

その彼の家庭に事件が起こった。小学三年生の息子さんが宿題に出されたとかで、近所の方にアゲハチョウの幼虫を貰った。その一匹は間もなくサナギに成長した。学校に持っていったら、このサナギは動かない、死んでいる。花壇に埋めよう、と友だちが言い、いや死んじゃいないよ、などという話になった。その日は幼虫も含めて学校に置き去りにして帰宅したが、後で友人が幼虫もサナギも埋めてしまったらしい。

子供のことで不思議に思いながらもそのままに過ぎ、二、三日して幼虫が「生き埋め」にされてしまったことが「発見」した。

父親は叱った。「いのちは一つで代わりはない。虫のいのちも人のいのちも同じで、かけがえない。人のいのちを三人も奪ったら、お前は刑務所で死刑だ！」。

虫のいのちを自分の身に引きあてて考えさせるために、父親は息子さんに作文を書かせた。